

■ 平成10年度事業概要 ■

I 文学資料の収集・整理・保存及び閲覧事業

寄附行為第4条第1号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 寄贈資料受入れ総数（図書・雑誌及び特別資料）3,918点
- 購入図書・雑誌 1,114点
- その他の購入特別資料 129点
- レプリカ作成・VTR、テープ、CD 8点

（別掲の統計・資料編資料編「資料収集状況」欄参照）

整理・保存 カード作成及び収蔵資料のコンピュータ入力並びに収蔵資料の寄贈・寄託目録作成等
閲覧 利用者 延べ2,663人

II 文学に関する展覧会・文芸講演会等の開催事業

寄附行為第4条第2号に掲げる事業は、次のとおり行った。

1 展覧会事業

(1) 常設展「北海道文学の流れ」

会期	通年
会場	北海道立文学館常設展示室
入場者	9,285人

展示の構成・内容は開館当時のものを踏襲しているが、4月に「北海道の詩」コーナーの展示替えを実施した。新しいコーナーでは、これまで壁面に登場していた明治後期の来道詩人たちを解説文中でふれることとし、北海道出身詩人の活動を中心に、解説、写真、直筆原稿、作品抜粋の他道内の詩誌分布状況（地図）や受賞歴などを壁面に提示した。また、展示ケースには詩人たちの代表的詩集や詩誌などを収めて紹介した。

以下に、展示編成の基本を掲げておく。なお、〔 〕内は監修者名を示す。

〈札幌農学校と有島武郎〉〔高山亮二〕

このコーナーでは、ウィリアム・S・クラークの事蹟によって広く知られている札幌農学校（現、北海道大学。明治9年開校）の存在と活動を紹介するとともに、その農学校に学び、のちに母校の教壇に立って多くの後進を育成し、文学者・思想家として日本近代史に刻まれる仕事を残した有島武郎について、内村鑑三、新渡戸稲造、森本厚吉、ティルダ・ヘックらとの交流を含め、通算12年間にわたる本道在任期の足跡を概観した。

〈北海道文学の流れ—明治・大正期〉〔木原直彦〕

このコーナーで取り上げた主な文学者・関連人物名、事項名は次のとおりである（以下同）。

* 「空知川の岸边」国木田独歩

国木田独歩、佐々城信子

* 開拓期を彩る作家群

岩野泡鳴、幸田露伴、長田幹彦、島崎藤村、葛西善蔵、徳富蘆花ほか

* 漂泊の人・石川啄木

石川啄木、石川節子、橘智恵子、野口雨情ほか

* 有島武郎をめぐる人々

有島武郎、有島生馬、里見淳、武者小路実篤、志賀直哉

* 道産子作家誕生

武林無想庵、岡田三郎、森田たま、中戸川吉二、中村武羅夫、子母沢寛、素木しづ、長谷川海太郎

* 同人雑誌群

「路上」「路傍人」「君影草」「白夜」「歩み」ほか

* 来道作家の足跡（大正期）

文学地図（足跡図）一吉屋信子、宮本百合子、橘外男、宮沢賢治、宇野千代、長田幹彦、久米正雄ほか

〈北海道文学の流れ—昭和前期〉〔西村信〕

* プロレタリア文学の潮流

葉山嘉樹、小林多喜二、久保栄、小熊秀雄、島木健作、本庄陸男ほか

* 若い詩人の肖像

伊藤整、川崎昇ほか

* 来道作家の足跡（昭和前期）

芥川龍之介、里見淳、鶴田知也ほか

* 農民文学の世界

吉田十四雄、辻村もと子、板東三百、早川三代治、坂本直行ほか

* 戦時下の文学

林容一郎、中津川俊六、八木義徳、寒川光太郎ほか

〈北海道文学の流れ—昭和後期〉〔神谷忠孝〕

* 戦後文学の展開

風巻景次郎、武田泰淳、宇野親美、中沢茂、澤田誠一、木野工ほか

* ささまざまな座標Ⅰ

船山馨、亀井勝一郎、八木義徳、和田芳恵、長谷川四郎、李恢成、重兼芳子、高橋揆一郎、小檜山博ほか

* 旋風をおこした作家たち

原田康子、三浦綾子、渡辺淳一

* ささまざまな座標Ⅱ

荒巻義雄、藤堂志津子、佐藤泰志、川又千秋、佐々木譲、土居良一ほか

* 来道作家の足跡（昭和後期）

福永武彦、戸川幸夫、新田次郎、水上勉、開高健、大江健三郎ほか

* 活躍する作家たち

三浦清広、加藤幸子、沖藤典子、久間十義、見延典子、辻仁成、谷村志穂

〈北海道の詩〉〔永井浩〕

* 草創期

児玉花外、高村光太郎、三木露風、宮沢賢治、北原白秋

* 生成期

更科源蔵、吉田一穂、左川ちか、猪狩満直、鈴木政輝、加藤愛夫、和田徹三ほか

* 戦争と詩

百田宗治、今井鴻象、鷺巣繁男、三谷木の実、牧章造ほか

〈北海道の短歌〉〔田村哲三〕

* 北海道歌壇の動き

山下秀之助、酒井広治、小田観螢、中城ふみ子ほか

* 来道歌人

斎藤茂吉、与謝野寛、与謝野晶子、斎藤史、宮柊二ほか

* 口語短歌

鳴海要吉、石川啄木ほか

* アイヌの歌人

バチラー八重子、違星北斗、森竹竹市ほか

〈北海道の俳句〉〔木村敏男〕

* 北方俳句の夜明け

松窓乙二、河東碧梧桐、牛島藤六、高浜虚子、長谷川零餘子、白田亜浪、石田雨圃子、青木郭公ほか

* 俳句近代化への潮流

荻原井泉水、泉天郎、長谷部虎杖子、唐笠何蝶、細谷源二、土岐鍊太郎、伊藤凍魚、水野波陣洞ほか

* 花ひらく北の俳句

斎藤玄、寺田京子、比良暮雪、佐々木丁冬ほか

* 俳句の現代

比良暮雪、佐々木丁冬、鮫島交魚子、園田夢蒼花、山岸巨狼ほか

〈アイヌの口承文芸〉〔藤本英夫〕

金田一京助、知里真志保、久保寺逸彦、金成マツ、知里幸恵、萱野茂

〈北海道の川柳〉〔斎藤大雄〕

* 明治～昭和前期

鈴木青柳、北村白眼子、亀井花童子、神尾三休、三輪破魔杖、井上剣花坊、鶴彬、西嶋〇丸、

田中五呂八ほか

* 昭和後期～平成7年

西村欣童、高木夢二郎、森田一二、甲野狂水、古田八白子

* 北海道の川柳社

道央、道南、道東、道北の各結社の活動と結社誌等を紹介。

〈北海道の児童文学〉〔柴村紀代〕

* 明治～昭和20年代

伊東音次郎、支部沈黙、坪松一郎ほか

* 昭和30年代

石森延男、神沢利子、安藤美紀夫、渡辺ひろし、玉川雄介ほか

* 昭和40年代以降

加藤多一、後藤竜二、長野京子ほか

〈千島・樺太の文学〉〔木原直彦〕

夏堀正元、吉村昭、李恢成、寒川光太郎ほか

(2) 特別企画展

● 「北海道の短歌」

会 期 平成10年4月25日(土)～5月31日(日) (33日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 1,034人

特別企画展「北海道の短歌」は、全体を大正・昭和期の「主な来道歌人」、戦前・戦中の「北海道歌壇の形成」、戦後の「北海道歌人会結成とその後の展開」、現代の「北海道歌壇の流れ」の4つのコーナーに分け、さらに北海道歌壇史年表も含めて明治・大正期から現代にいたる北海道の歌壇の流れを一望できるように展示、紹介した。各コーナーにはそれぞれの時代の短歌結社誌や合同歌集、個人歌集、自筆歌稿、短冊、色紙等を精選して展示し、本道歌壇の豊かな流れと、歌人たちの残したすぐれた成果を紹介した。



主な資料としては小田観螢や山下秀之助の自筆原稿、中城ふみ子の創作手帳、若山牧水や並木凡平の短冊などの特別資料のほか、伊東音次郎や北見恂吉、酒井廣治、土屋文明、齋藤茂吉などの著書、および主だった北海道短歌誌などを出品した。

● 「有島武郎とヨーロッパーティルダ、まだ僕のことを覚えていますかー」

会 期 平成10年8月8日(土)～10月11日(日) (56日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 2,860人

有島生誕120周年事業として取り組まれた本特別企画展は、日露戦争が終息した直後という時代背景のもと、札幌農学校を卒業し兵役を終えた若き日の有島武郎が、アメリカでの3年間の研修生活からの帰途に立ち寄ったスイスでのティルダ・ヘックとの生涯に渡る交流を主題として開催した。また開催にあたっては、スイス・シャフハウゼン市及び、有島武郎からティルダ・ヘックに宛てた書簡類を保管している同市図書館、ティルダ・ヘック自身を物語る資料を保管している同市博物館などからの全面的な協力を得た。



展示資料には、スイスから借用した書簡類、絵画、書籍、宿泊名簿兼雑記帳のほか日本国内にある有島のヨーロッパ体験に関する資料もあり、有島ファンや研究者ばかりでなく多くの方々の好評を得た。

有島生誕120周年事業は、文化庁、外務省、国際交流基金の後援を受けて、本特別企画展を皮切りとしてフォーラム、講演会、音楽と朗読の会など多くを実施した。

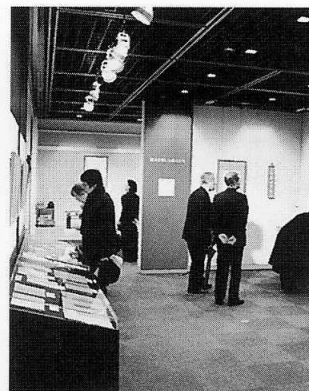
●企画展「吉田一穂とその時代－現代詩の極北をめざす－」

会 期 平成11年2月6日(土)～3月20日(土) (36日間)
会 場 北海道立文学館特別展示室
入場者 907人

本企画展は、日本の近代文学史において独自の詩的世界を確立し、詩史に不動の業績を刻んだ吉田一穂の全体像を浮き彫りにすることを目的に構成した。併せて一穂の絵本童話の世界をはじめ、編集者としての活躍、交流のあった北原白秋や金子光晴ら同時代の詩人・作家などにかかわる資料も展示し、一穂の多面的な活動も紹介した。特に貴重な展示品としては、アメリカ・メリーランド大学プランゲ文庫提供のGHQ（連合軍総司令部）による検閲跡のある一穂の絵本や子ども向けニュース誌などがあり、これらは谷暎子北星学園女子短期大学教授のプランゲ文庫での調査・研究がもとで展示できることとなった。

また一穂が没した後、枕元から発見された『桃花村』の草稿ノートや自らの戒名「白林虚籟（居士）」を記した墨書なども展示した。

展示室内では、遺品として一穂の長男・吉田八峯氏が保存していたパイプ、メガネ、棗、机、手帳などをお借りして一穂の書斎を復元し、好評を得ることができた。

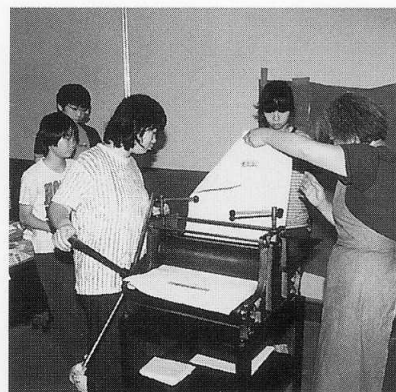


(3) ファミリー文学館（「たんけん文学館」を改称）

●夏休みファミリー文学館「エッチングでさし絵づくり」（講習会）

期 間 平成10年7月25日(土)～7月30日(木) (5日間)
講 師 大井戸百合子（銅版画家）
参加者 80人

ファミリー文学館では、札幌市在住の銅版画家大井戸百合子氏を講師に迎え、小学校高学年と中学生を対象にエッチング（銅板を使用した腐食版画制作技術）に取り組んだ。銅板に絵を刻んだ後に酸化第二鉄溶液に漬ける「腐食」という工程が参加者の興味を引き、また、最終日には各自が自分の作品に一文を寄せた。また、それぞれの作品は、作品展「わたしの銅版画作品！」の中で展示された。



〈付帯事業〉

●作品展「わたしの銅版画さくひん！」

期 日 平成11年1月9日(土)～17日(日) (7日間)
講 師 北海道立文学館講堂
参加者 465人

●作品解説とワークショップ「絵本を読む・絵本を描く」

日 時 平成11年1月9日(土)、10日(日)
講 師 北海道立文学館特別展示室及び講堂



参加者 26人

※以上の3事業は、札幌市教育委員会後援

(4) ※「母と子の文学のつどいー大井戸百合子・銅版画による絵本原画とさし絵展ー」

会 期 平成11年1月9日(土)～17日(日) (7日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

後 援 札幌市教育委員会、財団法人道銀文化財団

※冬休みファミリー文学館と併催

母と子の文学のつどいでは、札幌を拠点に活躍中の銅版画家・大井戸百合子氏の原画・さし絵展を開催した。展示会では、画文とも大井戸氏の手になる絵本「ふゆのいちばへおかいもの」の原画をはじめ、「ぼくとアルベスにいちゃん」「チロをさがして」のさし絵原画、代表作である市場シリーズ、新聞等に使用された小品、マレーシアに素材を求めた近作など150点を展示し、大井戸ファンをはじめたくさんの熱心な観覧者を迎えることができた。



2 講演会・講座等事業（会場は、特記したもの以外はいずれも北海道立文学館講堂、午後2時から）

(1)文芸講演会

●演 題 「アララギの歌人たちと北海道」

講 師 宮地 伸一（歌人）

日 時 平成10年5月23日(土)

聴講者 184人

●演 題 「スイスにおける日本文化の
受容史」

講 師 ルネ・シュベヒト（スイス・
シャフハウゼン市立図書館長）

日 時 平成10年8月8日(土)

聴講者 38人



スイス・シャフハウゼン市立図書館長であるルネ・シュベヒト氏を迎えて行われた本講演会では、氏によりシャフハウゼンで1900年代初頭に活躍していた芸術家らの集まり「フジヤマ・サークル」の構成メンバーや有島武郎・生馬兄弟との関係についての調査結果が紹介され、多くの出席者に感銘を与えた。

●演 題 「有島武郎とわたし」

講 師 永畑 道子（作家・熊本近代文学館長）

日 時 平成10年9月12日(土)

聴講者 87人

(2) 文芸セミナー

●演 題 「俳句で考えたこと」

講 師 辻協 系一（俳句作家）



- 日 時 平成10年7月4日(土)
 聴講者 62人
 ●演 題 「有島武郎と札幌の家」
 講 師 前川公美夫 (有島武郎研究家)
 日 時 平成10年8月22日(土)
 聴講者 69人
 ●演 題 「風土に育つ文学」
 講 師 鳥居 省三 (釧路短期大学教授)
 日 時 平成10年10月24日(土)
 聴講者 21人
 ●演 題 「吉田一穂の遺したもの」
 講 師 平原 一良 (当館事業課長)
 日 時 平成11年3月13日(土)
 聴講者 45人

(3) 独自企画講演会等

※有島武郎生誕100年記念事業関連講座・シンポジウム等

以下、共催関係はカッコ内に記すとおり。北海道立文学館 (全事業)、札幌市 (文学館フォーラム)、星座の会 (講座)、財団法人札幌芸術の森 (シンポジウム)。

また、後援は、国際交流基金、北海道新聞社、NHK札幌放送局、有島記念館、協賛は、財団法人北海道公立学校教職員互助会、財団法人北海道教職員厚生会から得た。

平成10年8月9日(日) シンポジウム「有島武郎とスイス」

R・シュベヒト (スイス・シャフハウゼン市立図書館長)

神谷 忠孝 (北海道大学教授)

ハイコ・ナログ (北海道大学助教授)

高山 亮二 (星座の会会長)

平原 一良 (当館事業課長)

聴講者 61人

(会場は札幌芸術の森センター内レクチャールーム)

平成10年8月23日(日) 作品鑑賞のつどい第1回「『星座』を読む」

藪 禎子 (近代文学研究者)

聴講者 45人

平成10年9月5日(土) 講座第1回

「有島武郎のアメリカ」

栗田 廣美 (白梅学園短期大学教授)

聴講者 55人

栗田廣美白梅学園短期大学教授により持たれた本講座は、有島武郎の思想形成に果たしたアメリカ留学の意義を中心に展開された。アメリカ近代文明の重圧や留学時期と重なった日露戦争の影響により従来の思想的基盤を



喪失した有島武郎が、金子喜一やアメリカ社会主義左派との交流の中で国家否定・革命肯定へとその心情を変化させていく流れを検証する講義は、有島研究の新しい領域を示した。

平成10年9月11日(金) 音楽と朗読の夕べ「有島武郎が聴いたティルダの歌声」

声楽：浅里いづみ ピアノ：浅井智子 他

参加者 79人

有島武郎がシャフハウゼンで聞いたティルダの歌声を再現するべく行われた「音楽と朗読の夕べ」では、「小さきものへ」の朗読に続いてスイス古謡、ブラームス歌曲、モーツァルト、シューベルトの小品などが演奏され、参加者それぞれが有島武郎とティルダ・ヘックに思いを馳せながら、夕べのひとつときを過ごした。

平成10年9月26日(土) 講座第2回「新渡戸稲造・内村鑑三と有島武郎」

高山 亮二(星座の会会長)

聴講者 95人

平成10年9月27日(日) 作品鑑賞のつどい第2回『『カインの末裔』を読む』

工藤 正広(北海道大学教授)

聴講者 66人

(以上、会場は共に北海道立文学館講堂)

平成10年10月3日(土) 文学館フォーラム「有島文学の現代性」

神谷 忠孝(北海道大学教授)

井上 理恵(吉備国際大学助教授)

中山 昭彦(北海道大学助教授)

山田 俊治(横浜市立大学助教授)

聴講者 96人

(会場は札幌時計台講堂)

※吉田一穂生誕100年記念事業関連特別講演会

平成11年2月6日(土) 「白鳥古丹と吉田一穂」

講師 添田 邦裕(詩人)

聴講者 54人(会場は北海道立文学館講堂)

(4) 映像鑑賞のつどい

●文学映画鑑賞会

期 日 平成10年6月21日(日)「氷点」

入場者 56人

28日(日)「幻の光」

入場者 15人

11月7日(土)「華の乱」

入場者 50人

会 場 北海道立文学館講堂及び特別展示室

入場者 延べ199人

●フィルムレクチャー「映画創生期とアヴァンギャルド映画」

期 日 平成10年11月14日(土)
会 場 北海道立文学館講堂
講 師 中島 洋 (シアターキノ代表)
入場者 78人

III 北海道文学に関する調査研究事業

寄附行為第4条第3号に掲げる事業は、次のとおり行った。

有島武郎及びティルダ・ヘックに係る書簡・絵画等資料の所在並びに保存実態調査をスイス・シャフハウゼン市において実施。

- 有島武郎関連資料調査 (国内)
- 吉田一穂資料調査
- 日本近代文学館等資料受入れ、整理実態調査
- 特別企画展・企画展の図録・リーフレット作成調査

IV 文学愛好団体等の活動に対する支援事業

寄附行為第4条第4号に掲げる事業は、次のとおり行った。

次の団体の事業に対して、名義後援の使用を承認して支援した。

- 現代俳句協会、中北海道現代俳句協会
『現代俳句の100冊』色紙・短冊展
(平成10年6月27日～7月5日 北海道立文学館特別展示室)
- 有島記念館
特別展「いま 見直す 有島武郎の軌跡」
(平成10年7月18日～11月7日 ニセコ町同館)
- 古平町、同教育委員会、古平町吉田一穂の会
「生誕百年 吉田一穂記念展」
(平成10年8月13日～20日 古平町文化会館)
- 縄文詩劇の会、創造集団ノール
「ポエムコンサートー詩と音楽と演劇のつどいー」
(平成10年8月15日 北海道立文学館講堂)
- 「ロルカの夕べ」実行委員会、ボッセの会ほか
「G・ロルカの夕べ」
(平成10年11月21日 北海道立文学館講堂)

V 啓発広報事業

寄附行為第4条第5号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 施設案内、常設展リーフレット、各展覧会ポスター・ちらし及び講演会・セミナーちらし等を制作・発行。
- 広報誌「サンクンガーデン」第6号(平成10年10月)、第7号(平成11年3月)の編集発行。
- ※「北海道文学館報」第48号(7月)、第49号(12月)の編集発行。

VI 刊行物の刊行事業

寄附行為第4条第6号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 特別企画展「北海道の短歌」図録（B5判、32頁）の刊行。
- 特別企画展「有島武郎とヨーロッパ」図録（A B判、48頁）の刊行。
- 所蔵品展「吉田一穂とその時代」リーフレット
- 吉田一穂生誕100年記念図書『北斗の印』
古平町、同教育委員会、記念事業実行委員会との共同企画・刊行。

VII 北海道立文学館の管理運営受託事業

寄附行為第4条第7号による道立文学館の管理運営は、北海道と当財団との間に交わされた委託契約（4月1日締結）に基づき、適切に行った。

VIII その他の付帯事業

※古書市'98文芸おたのしみバザール

平成10年9月12日(土)、13日(日) 文学館1階ロビーで実施。

ミニ古書市地階にて通年実施。ともにチャリティ・バザール実行委員会（田村哲三委員長）との共催。

- (注)
- 本項中、※印の事業は財団の独自企画のものを示す。
 - 文中、講師名等の敬称は省略した。